MEET ARTISTS

MEET CHILDREN

児童養護施設のこれからを考えよう

～アーティスト・ワークショップの実践から～

特定非営利活動法人

芸術家と子どもたち

2016-2017

REPORT

アートの力ってどこにあるんだろう？

ワークショップを重ねると、
いつのまにか子どもの表情がやわらいできていることに気づく。
目の輝きが違ってきた。
特別な魔法をかけたわけでもないのに･･･。

なにかをつくりだす経験。 試行錯誤する経験。
小さな失敗と小さな成功を積み重ねる経験。
ひとと関わり、ひとに自分をさらけ出す経験。
ひとの表現を面白がる経験。
ひとと悔しさや哀しみ、喜びを分かち合う経験。
みんなでひとつのことを成し遂げる経験･･･。

アートが子どもに提示しているのは、
きっと、 もうひとつの選択、 もうひとつの表現、 もうひとつの生き方。
正解が何かはわからない。 正解はひとつじゃない。
正解なんて実はどうでもいい。

互いに認め合うこと。 互いに関わり合うこと。
時間を共有すること。 一緒に作業すること。
様々な生い立ち、 様々な入所理由、 親・家族との様々な関係、
それらを呑みこみ、 吐き出しながら、
いまを感じ、 いまを表現する･･･。

どの子も素晴らしい。
たとえいまはそれを怒りでしかあらわせなくとも。
たとえいまはそれを表情にあらわせなくとも。
みんな素晴らしい。

現在の社会的養護のしくみが良いとは思わない。
現場を見てると、そりゃ無理でしょ、と思うこともある。
子どものことを考えたらこういう制度じゃないでしょ、とも思う。

でも、目の前の子どもはいまを生き、待ったなしに成長している。
目の前の子どもと何ができるか考えよう。
アートの力を信じて…。

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
代表　堤 康彦

きっかけづくり

芸術家と子どもたち スタッフ
永田菜々

子どもたちの「いいこと考えた！」
「こうしてみようかな？」という表情。
そこに漂う素直な心の動き。

初めてのアートや人と出会う場は、
もちろん緊張する子もいるけれど、
初めてとは思えないほど
懐いて離れなくなる子もいます。

それはどちらも、大人と関わりながら、
安心できるかどうかを本能的に
見極めているようにも思えます。

アートによって、空間や時間、
人と関わり合う様々な「きっかけ」を
送り続けることで、
自然と子どもたちは距離感をはかったり、
感情が揺さぶられたりする経験をします。

そんな風にして心が動く経験は、
子どもたちが、次の面白いことを見つける力の
「きっかけ」になるかもしれません。

安心して未来を探せるように。

つながる思いが、じんわり届くといいなと
思っています。

「またね」の約束

芸術家と子どもたち スタッフ
中西麻友

うたったり踊ったり何かをつくったり、
アーティストと一緒にちょっと不思議な
表現に出会う子どもたち。

最初はわけがわからなくて抵抗してみたり、
場に一緒にいられなかったり、
何かを共有できるまでには時間がかかります。

でも、泣いたり笑ったり、
子どもも大人も関係なく
想いを分かち合っていく時間は、
何気ない一瞬までが大切な
積み重ねとなります。

その過程でみんながつくり出す表現には、
発見や驚きが詰まっていて
見る人の心を動かします。

子どもが対峙している今、
そしてこれから向き合う未来は、
厳しいものかもしれないけれど

「またね」と言ってくれるみんなのところへ、
アートを携えてこれからも通い続けること。

そうして、みんなの未来のことを一緒に考えて、
つくっていきたいと思います。

安心できる居場所

芸術家と子どもたち スタッフ
青木薫未

大人（アーティスト・職員）も子どもも、
日常生活での立場関係なしに同じ目線で
一緒に身体を動かしたり、
美術をつくったり、
演奏したりと試行錯誤できるワークショップは、
自分のことを認め受け入れてくれる
人の存在を実感できる、
安心できる居場所になっています。

様々な事情があってここにいて、
「学校や部屋だと人間関係がうまくいかない」
などの課題があっても、
人と関わり、協力することの良さを、
時間をかけて共有していきました。

揉めてしまったり、思うようにいかない時も、
逃げ出さずに同じ空間にいてくれる。

がんばってみようと思ってくれる。

この経験はきっと、
子どもたちの日常生活や
未来にも活きていきます。

安心できる居場所を、
一人でも多くの子に
つくり続けていきたいです。

児童養護施設の現状

特別なケアが必要な子どもたちが増えている

近年、保護者がいない、もしくは保護者の適切な養育を受けられない子どもが増加傾向にあり、社会的養護が必要な児童は約45,000人、そのうち26,449人（福祉行政報告例より平成29年3月末現在）が児童養護施設に入所しています。様々な課題を抱えた児童の割合も増加しており、社会的養護の対象となる子どもにこそ、社会の変化にも対応したより細やかな支援の充実が求められています。

表1：児童養護施設入所児童の被虐待経験の有無

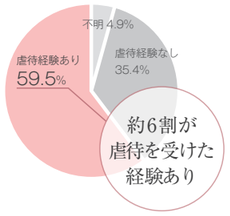


表3：児童養護施設入所児童のうち、障害等がある子どもの割合

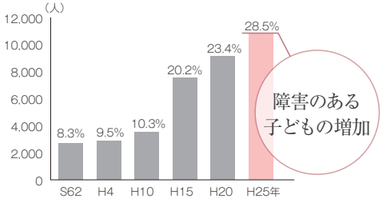
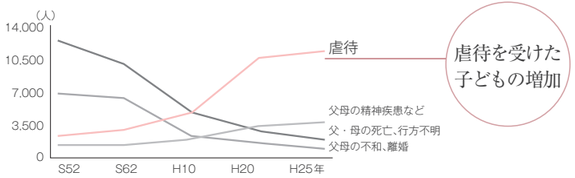


表2：児童養護施設の児童の措置理由（養護問題発生理由）の推移



自立支援の充実が必要

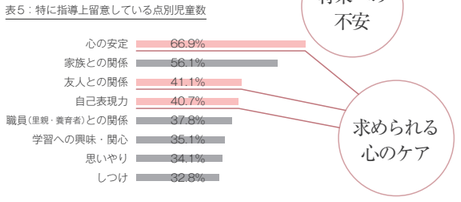
児童虐待の増加などに伴い、虐待を受けた子どもなどへの対応や、退所後の自立を見通した支援など、きめ細やかな、個人に寄り添った自立支援が求められています。

表4：児童養護施設の年長児童（14歳以上）の将来の希望（家庭復帰、結婚、自立）

	家庭復帰	結婚したい	生活していく自信
総数（8,412）	34.4%	41.8%	29.1%
男（4,417）	32.8%	41.0%	32.6%
女（3,951）	36.1%	42.8%	25.2%

※総数には、性別不詳、年齢不詳を含む。

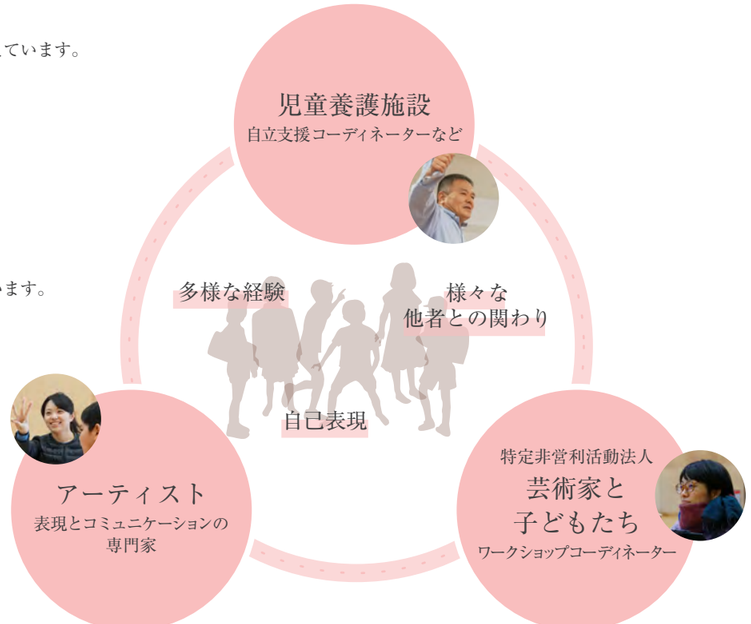
表5：特に指導上留意している点別児童数



【出典】
表1／4／5：厚生労働省雇用均等・児童家庭局（平成27年1月）
『児童養護施設入所児童等調査結果（平成25年2月1日現在）』
表2／3：厚生労働省『社会的養護の現状について（参考資料）』（平成26年3月）、
厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課『社会的養育の推進に向けて』（平成29年12月）

私たちの取り組み

児童養護施設で暮らす子どもたちは、
施設だけでは抱えきれないほど様々な課題を抱えています。
特に大人との関わりが希薄なため
自分一人では心の安定が図れず、
自己表現が苦手なためにSOSを出せない
子どもたちが増加しています。
芸術家と子どもたちでは、
アートを通じて課題にアプローチするべく、
経験と実績が豊富なアーティストを派遣し、
施設と連携しながらワークショップを実施しています。



平成28･29年度実施概要

公益財団法人東京都福祉保健財団「東京子育て応援事業」の助成を受けて、
下記の都内3箇所の児童養護施設にて、アーティスト・ワークショップを実施しました。

施設名：クリスマス・ヴィレッジ(足立区)

対象：小学2～高校1年生18人	概要：2016年12月～2018年2月まで、月1回程度のペースでワークショップを実施。 最初の数回は学年により前後半の2グループに分け、途中からは全員一緒に活動。 内容：子どもたちと一緒にオリジナルのお芝居をつくり、最終日に発表を行いました。 衣装や舞台美術、劇中の音楽も子どもたちと一緒に相談しながらつくりました。 様々な表現方法を知り、みんなで協力して一つのものをつくり上げる体験を通して、 一人ひとりの表現が認められ、人と関わる楽しさを味わいました。
日数：13日間	
時間：各回2～3時間	
発表の機会：職員や施設内の子どもたちに向けて発表	
作品タイトル：『マリアと伝説の指輪』	
アーティスト：棚川寛子(舞台音楽家)	
アシスタント：井上貴子(俳優)、加藤幸夫(俳優)	

施設名：二葉むさしが丘学園(小平市)

対象：小学1～中学3年生12人	概要：2017年7月～2018年2月まで、月1～2回程度のペースでワークショップを実施。 内容：身体を使った表現を経験する中で、自然と人と関わり合いながら自己表現を楽しめるように なっていきました。相手の動きを真似ることで、相手の気持ちや思いを感じ取るなど、言葉を 使わずに身体でコミュニケーションをしながら、子どもたちの関係性を深めていきました。 最終回にはワークショップで取り組んだ要素をまとめてダンス作品として発表しました。
日数：13日間	
時間：各回1.5時間	
発表の機会：職員や施設内の子どもたちに向けて発表	
アーティスト：入手杏奈(振付家・ダンサー)	
アシスタント：斉藤稚紗冬(ダンサー)、酒井直之(ダンサー)	

施設名：子供の家(清瀬市)

対象：年長～高校2年生11人	概要：2016年11月～2017年9月まで、月1～2回程度のペースで、学年により前後半の2グループに 分けて活動。 内容：身体を使った表現を試し、子どもたちのアイデアや好きなことが何かを探りながら進めました。 靴下での人形や段ボールでの獅子舞づくりなどものづくりを取り入れたり、お鍋で音楽を つくったり、影絵や、屋外で巨大なビニールチューブで遊んだり、身体、音楽、造形など様々な 経験をして、最終回にパフォーマンス作品として発表しました。
日数：16日間	
時間：各回2時間(前後半)	
発表の機会：職員や施設内の子どもたちに向けて発表	
アーティスト：新井英夫(体奏家・ダンスアーティスト)	
アシスタント：板坂記代子(ダンサー)、古川東(演出家・アクティングトレーナー) はしもかゃゆうき(即興ピアニスト)	

CASE1

クリスマス・ヴィレッジ（東京都足立区）

お互いを認め合い、みんなでつくるお芝居

子どもたちのアイデアが詰まったオリジナルの物語。
衣装も小道具も全部手づくり。
いろんな表現方法を駆使して
みんなで一つの作品を生み出す過程で、
協力する難しさや楽しさをたくさん経験していきます。

感じるままに音楽を奏でよう

楽譜も技術もいりません。好きな楽器を好きなように鳴らしてみるところから、どんどん音楽が生まれていきました。お互いの音やリズムを感じて、どんな音なら、どんな歌詞ならもっと楽しく、もっと面白くなるかを、子どもたちとアーティストが一緒に考えました。ギターを弾きたい子はギター、パーカッションのリズムが好きな子はカホンと、一人ひとりの得意なことや興味のあることから挑戦しました。「やってみたい」という気持ちから、新しい何かが始まります。

思い思いに好きな楽器を演奏します

衣装や小道具づくりはみんなで協力して

登場人物の衣装や、背景、小道具などの舞台美術もみんなで一緒につくりました。一人では難しいかもしれないけれど、お互いに相談し、助け合いながらお城や大きなケーキを工作していきました。職員やアーティストも一緒になって「ここ持って！」「こうしたらいいんじゃない？」など作業中はとっても賑やか。音楽にダンス、美術も含めて一つの物語をつくる過程で、大変なことや楽しいことなど、いろんな気持ちをみんなで共有しながら作品を完成させました。

舞台や小道具は全て手づくり！

職員のこえ

新井隆徳さん
クリスマス・ヴィレッジ
自立支援コーディネーター

普段の生活ではなかなか居場所を見つけられない子も、ワークショップの最中だけは居場所があり受け入れてもらえるという経験は、子どもたちに大きな影響があったと思います。参加した全ての子どもに何らかの変化がありました。始めはあまり協力的でない子も多かったのが、回を重ねるごとに落ち着いてきました。

ワークショップ中、ある子が楽器を壊してしまいました。挑発的な態度や勝手な行動が多かった子でしたが、終了後謝りに来て、次の時「あの楽器は？」と気にしていたので直ったことを伝えると、パッと明るくなりました。それからは劇にも参加し、初めて最後までやり遂げてくれました。その変わりようにスタッフ一同驚き、感心しました。

自分の思ったことをきちんと相手に伝えることができるようになった子も多いです。お別れ会の時に手紙を書いて持って来てくれた子もいました。生きていくうえで意思表示ができたり、自分の気持ちを素直に伝えようとすることはとても大事なことです。このワークショップを通してそのきっかけを与えてもらえたのは間違いないと思います。

CASE1

アーティストのこえ

棚川寛子さん
舞台音楽家

お芝居で自分の居場所をつくる

ワークショップを通じて子どもたちに
どのようなことを学んでほしいですか？

「学ぶ」までいかなくとも「感じる」経験をしてくれたらなと思っています。役割や居場所を見つけた時の安心感や気持ちを伝えられた時の喜び、うまく伝わらない時のもどかしさなど、子どもたちが子どもなりに自分自身と向き合うキッカケになればいいなぁと。

実際は、ゼロから創作することでワークショップを進めていきます。お芝居で使う台本は、ゼロからみんなでつくり上げていきます。最初はカードゲームで遊びながら、出たカードの絵をもとに登場人物を決めてみたり、子どもたちにアドリブで喋ってもらってそれをセリフにしたり。特別支援学級の子どもたちは特に発想力があって面白いです。

お芝居は子どもたちが自分の役割や居場所を見つけられるもの。演じるだけじゃなくて衣装や舞台美術をつくったりと、自分のやりたいことを活かすことができます。演じる時は全然集中できなくても工作だと能力を発揮してくれたり、自分は出ないのに小さい子に衣装を着つけてあげたり、様々です。誰かにやってあげるということも役割の一つだし、自分の居場所や役割を見つけられる可能性が、舞台の中にはたくさん隠れているんです。

また、それぞれが役割を持って一つの作品をつくり上げる過程では、意見が合わなくて必ず喧嘩になります。台本の方向性とか、自分のやりたい役ができなかったりとか。こうして喧嘩することは、成長の過程でとても大事。今は要件を伝えるツールは進化しましたが、生のコミュニケーションを経験する機会がすごく減っています。それでいて世の中からはコミュニケーション能力の高い人間が求められています。子どもたちは喧嘩をする中で、自分の感情とどう向き合って処理していくか、折り合いをつけていくかを学びます。自分の思い通りに行かなかった時に「こういう気持ちになるんだな」とか「こう伝えればいいんだ」とわかっていくんです。

アートは自分の感情の代弁手段

この経験が子どもたちのこれからの人生に
どう影響すると思いますか？

私たちが用意できるのは本当に小さな経験でしかないと思いますが、その蓄積がやがて子どもたちの想像力を伸ばすことにつながると思います。

演劇って目の前で役者さんが想像しているものを生で感じられるもの。役者さんが海を見ているシーンでは、その海を想像する。「実際はない」ものでも頭の中でつくれる。それが想像力。想像力は、生きていくうえで自分の時間を豊かにできるものです。辛いことから逃避できたり、自分を奮い立たせる勇気に変わったり。想像の中ではお姫様になっても大金持ちになってもいいわけです。

これからの人生において、子どもたちには辛いことがたくさん訪れるでしょう。そんな時に本を読むと、思考が一度別のところに外れてくれます。絵でもダンスでも、想像力を使う何かを見つけることが辛いことからの回避にはとても大切。また、自分ではうまく言葉にできなかった感情が、本の中や絵や音楽で表現されているのを発見することもある。代弁してくれてるものに出会った時に、一つ表現手段を得られるのです。それが自分の中に蓄積していくと、辛い時に「こういう風に辛い」と言えるようになるんです。それが人として一段ちょっと上がる、大人になるということ。アートは言語で説明しきれない言葉に出会えるものです。

子どもの時に、どれだけたくさんそういうものに出会ったかはとても大事。想像力というのは、いろいろな意味でその子の生活を安定させたり、思考をより豊かにしてくれるんです。

子どもたちの欲求に
とことん付き合う

子どもたちにはどう接していますか。

ワークショップの時間だけは「何が起きてもいい場所」をつくるようにしています。施設の職員さんは安全面などを気にしないといけないから、私たちといる時は何をしてもいいよって。例え失敗しても、それが気づきのチャンス。転んだら「ここで走ると危ないんだ」とわかるように、一度痛い思いをすれば次どうすればいいかわかるので、なるべく大人が先回りしてやらないようにしています。子どもたちの「失敗する権利」も奪いたくないんです。「こうしてほしい」とか「こうしなさい」という要求もなるべくせず、一度子どもたちの欲求にとことん付き合うようにしています。だからお話をつくる時も、話し合いがずっと止まらないんですよ。みんなが飽きるまでやっています。

子どもたちと取り組む中で、
ワークショップは予定通り進んでいきますか？

予定通り行かなくて当たり前だと思っています(笑)。もちろんある程度の進行は計画して臨みますが、子どもたちの調子は毎回違うし、思う通りに進まなくてもなんとも思いません。みんながバラバラでカオス状態になっても動じない。そもそもほとんどの子が話聞いてないですしね（笑)。それをよしとするのが続けていく秘訣ですね。この子たちがこの場にいてくれるだけでいい。話聞いてないけどいてくれるからいいかって思います。

そう思うのって子どもたちが社会に出てからも大事なことですよね。世の中のことってたいていうまくいかなくて、それが当たり前。それでも「大丈夫だ」って思えること。それが子どもたちにとっては支えになるんじゃないかと。

なるべく多くの大人と出会うこと

外部の人がワークショップをすることに
どんな意味があると思いますか？

子どもの頃にどんな大人に出会っているかということは、成長したあと物事を判断する時の大きな要素になると思います。18歳で世の中に放り出されちゃう児童養護施設の子どもたちが、相談する人がいない中で何かを選択しなくてはいけない時、「こういう考え方もあったな」という判断の材料の一つに私たちはなれる。私たちとの出会いを「こんな変な大人がいたな」って心の引き出しにしまっておいてもらえたら。ワークショップの数回だけでは彼らの人生の中でちょっとした絆創膏のようにしかならないけれど、出会わないよりは出会っておいた方が良かったなと、その程度ですけど役に立てていたらいいなと思います。

子どものこえ

音楽との出会い
高校１年生

ワークショップはどうですか？

みんなと交流したり、いろいろなことに挑戦できるのが楽しいです。僕はワークショップでギターを始めて、今では学校の文化祭で発表したりしています。今年のワークショップでは曲をつくらせてもらいました。役割を与えてくれるから、責任を持たなきゃという意識になるのが良かったです。

ワークショップで何を学びましたか？

人と話すのが苦手だったけど、ワークショップは楽しい雰囲気だったからすぐに慣れて、会話をするのが楽になりました。今は普段の生活でも会話がうまくできるようになりました。

将来はどんな大人になりたいですか？

自分の趣味を活かして何かをしたり、新しいことに挑戦もしていきたいです。人から頼りにされて社会で認められる大人になれたらいいなと思います。

CASE2

二葉むさしが丘学園（東京都小平市）

人と関わりながら、身体で想いを表現する！

ある一枚の絵をみんなの身体で表現したり、
自分の名前を身体で描いたり、
身体を動かして誰かと一緒に関わり合いながら、
コミュニケーションや表現する楽しさを
味わいます。

誰かと一緒に表現する

簡単なルールのあるワークをいろいろ試しながら、どんな身体の表現ができるかを丁寧に探っていきました。
二人組で掌を合わせたまま体育館を歩いたり、向き合ってお互いの動きを鏡のように真似したり、相手の身体を操り人形のように優しく動かして形をつくるなど。アーティストや子どもたち同士で相談したり見せ合ったり、どんなアイデアも大切に受け止めて、正解も不正解もない自由に表現できる場をつくっていきます。

身体の魅力を引き出す

アーティストが出すお題に、即興的に反応することで身体の表現を引き出しました。身体のいくつかの部分を床につけてポーズを考える場面では、膝をついたり、足の裏をつけたり、お尻で座ったり、いろいろな表現が生まれました。アーティストは「それいいね！」と声をかけ、子どもたち同士もお互いの表現に刺激を受けてどんどん新しい形をつくっていきました。難しいお題のように感じても、とにかく身体を動かしてみれば、一人ひとりのかけがえのない想いが身体に表れます。

相手の身体を動かして面白い形をつくる

床に身体の一部分をつけたポーズを考える

SCHEDULE

6月	職員の方、アーティスト、事務局スタッフで打合せをし、子どもたちの実態を伺いながらワークショップの内容を検討しました。
7月	ワークショップ開始。アーティストたちは身体を動かしてダンスで自己紹介。新しい出会いに子どもも大人も少し緊張しながらのスタート。
10月	子どもたちも慣れてきたところで、最終回に発表会があることを相談。みんなで一緒に協力して取り組む姿勢も育っていきました。
2月	職員の方や児童に向けての発表会。たくさんの人に拍手をもらい認められる経験が一人ひとりの自信につながります。

CASE2

アーティストのこえ

入手杏奈さん
振付家・ダンサー

ふれあいの経験を積み重ねる意味

**ワークショップを通じて子どもたちに
どのようなことを体験してほしいですか？**

まずは人にふれることに慣れていきながら、自発的に身体を動かすことで感覚を開いていくことですね。人とふれあう経験が少ない子は、距離を置き過ぎたり、逆に近過ぎることがあります。他の人にふれるワークの時に、どれくらいやったら相手が痛いだろうというのがわからない。ふれるといっても撫でたり押したり、ふれ方によって伝わること、表現できることが違うんだと知ってもらいたいです。それがわかると普段の生活の中でも、ものの感じ方が豊かになっていくと思ので、そういう感覚を広げてあげたいです。

あとはどんなに小さな動きでもいいから自分のこだわりや欲求を出せるようになるといいと思います。人と違ったことを発信するのって最初は恥ずかしくて怖いのですが、勇気を出してちょっとでもいいからやってみる経験が、これから社会に出て行った時に活きたらいいなあと。

子どもたちは初回からどう変わっていきますか。

ペースはそれぞれですが、どんどん変わっていきますよ。最初はその場にいるだけでワークには参加してくれないような子も、ちょっとずつコミュニケーションを取っていくと、ある時急に入って来てくれたり。逆にいい調子で続けていた子ができなくなったりというケースもあります。とにかくしつこく声をかけていくしかなくて、やさしくすればいいというわけではないと思っています。その子の中で何がきっかけになるかわからないから、諦めずに向き合っていくしかないです。

あとは相性もあるので、スタッフやアシスタントとコミュニケーションを取ってもらったり、みんなに助けてもらいながらやっていきます。

たくさんの人と関わることが
生きていくうえでの支えになる

**外部の人がワークショップをすることに
どんな意味があると思いますか？**

ダンスをつくる作業ってとても孤独なものなのですが、私の場合はそういう時に周りで支えてくれる人たちによって今の自分が形成されている感覚があり、それがダンス以外で普段生活していくうえでも助けになっています。たくさんの人との出会いは、その子が生きていくうえでの支えになるものです。自立って一人になることではなくて、いろんな人の力を借りてやっていくもの。ここの子どもたちも外から来た人とダンスしたり、ワークショップ以外にもいろんな経験を通して、自分がどういう人間なのか少しでも気づいていってもらえたらいいなと思います。

一緒に作品をつくる共同作業

子どもたちにはどう接していますか。

子どもたちの入所理由や家庭状況を把握はしていないのですが、想像もできないくらい過酷な状況にいるかもしれないし、私なんかよりもよっぽど揉まれて生きているかもしれない。だから私が教える立場にいるというよりも、同じ目線で一緒にものづくりをしている感覚でやっています。

他の施設でも、話を聞いてもらえなくて収集がつかなくなることもありますが、この子たちがこの場に来てくれるだけでも充分。今はできなくても、彼らのこれからの人生でちょっと頑張らなきゃいけない時や、人の話を聞かなきゃいけない時が訪れた時に、この経験が少しでも糧になったらいいなと思います。

多様な経験が
子どもたちの価値観をつくる

この経験が子どもたちに与える影響は？

本人よりも周りが変わることがありますね。以前中学校でワークショップをやった時に、通級に通う子たちがいて、ダンスがすごく良かったのでちょっと多めにパートを担当してもらったんです。その子たちは普段クラスでは認められる機会が少なかったりするけど、私が「すごくいいね」と褒めると、周りが持っている普段の価値観が揺らぐわけです。ダンスなどのアートだとそういうことが起こる。勝ち負けじゃなくて、いいものはいい。多方面の経験をさせて、自分の特性、相手の特性それぞれがあることを知るのは大切なことだと思います。

二葉むさしが丘学園の子どもたちの様子はどうですか。

参加してくれているのは小1から中3の12人で、男女はちょうど半々。通常級と特別支援学級の子どもがいて、近所のグループホームから通ってくる子どももいます。最初から積極的に参加してくれて、私たちのことを受け入れてくれるのもとても早かったので、初回からいろいろなことを試すことができました。やることをかっちり決めないで、任せた方が仲良く楽しんでやってくれました。どうしても低学年の子の集中力が続かないこともあったので、最初の1時間だけ参加してもらい、最後の30分は高学年と密度の濃いワークをやることもありました。高学年の子たちはすごい集中力で、いろいろなアイデアを出してくれました。

発表はどのようなものですか。

最終回に施設や地域の人20人くらいに向けて発表します。振付が決まっているのではなく、シーンやルールだけあって、その中で思いっきりやってもらいます。

ワークショップとは違って、見られているという意識に切り替える必要があります。身体を大きく使うとか、意識することがたくさんあります。とても難しいことなので頑張らないとですが、せっかく私たちアーティストが入るので、お遊戯とは一味違う人に見せられるものに仕上げたい。舞台に立って衣装を着て、見てもらうことで、一つ自分の気持ちが上がるという経験もしてほしいんです。13回のワークショップの間、彼らの中でいろいろなことが起きてるから、うまくいってもいかなくても、1シーンだけでも出て、発表することで感じる気持ちを痛感してもらいたいと思います。

子どものこえ

みんなでつくる
中学３年生

ワークショップはどうですか？

みんなで一緒に踊りを完成させていくのがとても楽しいです。だんだんとみんながお互いのことを知っていき、まとまっていくのが嬉しいので、一人でやるよりもみんなとやる方が好きです。もちろんうまくいかない時もありますが、どうしたらうまくいくかを考えて工夫しています。

ワークショップで何を学びましたか？

友だちとたくさん遊べるようになったり話せるようになりました。ワークショップに参加していなかったらそんなに人と関わってなかったと思います。

将来はどんな大人になりたいですか？

食品関係の仕事に就きたいと思っていますが、それ以外にもいろいろなことを積極的にやってみる人になりたいです。難しいこともあると思いますが、うまくいくように工夫して頑張ってみたいと思います。

CASE3

子供の家（東京都清瀬市）

一人ひとりを活かした創作パフォーマンス

アーティストの新井英夫さんは、好きなことや興味のあることなど
子どもたちの「やりたい思い」を尊重しながらワークショップを進めました。

アーティストがいろいろなモノや仕掛けを投げかけるなかで、
子どもたちはいろんな楽しみ方を探していきました。

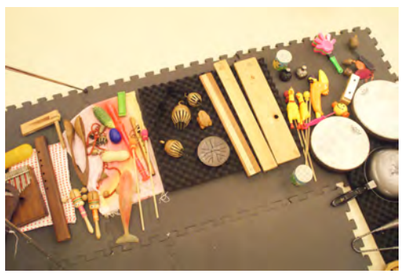
布にくるまるのが好きな子、影を使った表現が得意な子、
人形づくりで細かく作業をする子、みんなの写真を撮る子など、
いろんな景色が広がりました。

最初はみんなで一つのやりたいことをやる時間が多かったのですが、
次第に布をかぶっていない子、影をつくらない子たちなどが、
タイコや笛で音楽をつけてみることもチャレンジしていました。

作品発表では子どもたちの個性を活かし、
身体を動かすのが好きな子どもたちは長い布をかけて巨人になってみたり、
長くのびた紐にふれずにギリギリでよけながらポーズを決めてみたり
モノと身体を使ったいろんな表現が生まれました。

アイデアが豊富な子どもたちは、どうしたら影で魅力的に表現できるかを考えたり、
アーティストの即興ストーリーを聞いて瞬時に役割を探し、
身体や手づくりの靴下人形を動かしたりして楽しいパフォーマンスをつくり上げました。

観客も巻き込んでの発表会



楽器と鍋やおもちゃも使った生演奏でパフォーマンスを盛り上げる

職員のこえ

角能秀美さん
子供の家
自立支援コーディネーター

初めてのアーティストと、初めての内容でのワークショップは、楽しみ方を模索しながら進めていきました。始めは子どもたちの中にも戸惑いがあり、鬼ごっこやだるまさんがころんだなど形の決まった遊びには入れても、慣れていない自由な表現遊びとなると集中できないことが多かったです。それも次第に慣れていき、自然に遊ぶようになりました。自分や相手の身体、新聞、紐など身近なものを使って楽しむことができるということが、新しい発見になったのではないでしょうか。

「暇つぶし」と言いながらもいつも参加し発表会では舞台にも立てた高校生の女の子や、のびのびと独自の表現を見せていた男の子、人との直接のコミュニケーションや人前に出ることは苦手でも写真や動画の撮影と監督的役割を担っていた小学生の女の子など、参加の仕方はある程度自由ななか、それぞれが無理なく自分の個性を発揮していたように感じました。また、子どもたちにとっては大人とたくさん遊べるという点も何より嬉しかったのではないでしょうか。

私自身も参加するたびに非日常的な活動を楽しませていただきました。制作の際は、同じ素材でも子どもによって選ぶものや使い方が全然違うということが興味深かったです。個人的には身体の「感覚」というものに注目しており、なかなか普段の生活ではアプローチが難しいのですが、今回のワークショップでは身体のすみずみまで使う活動もあり、さらにそれを楽しみながら行えるといういい機会でした。遊びの中での自然な笑顔を見て、「この子いま、“遊んで”いるなぁ」と感じる場面が嬉しかったです。

アーティストからは、子どもたちの感性や遊び方に注目した視点でのフィードバックがあり、職員としても興味深かったです。

発表を見た職員からは、「普段見せないような動きに楽しませてもらった」「たくさんの大人に見てもらって満足気な様子に職員もほっこりした」「影絵の表現が面白かったし驚いた」「子どもたちがワークショップの中でエネルギーを発散できているのは良いと思う」という感想や、アーティストの方々が子どもたちをどんどん引き込んでいくのを見て「職員にはできないプロの技だね」といった声がありました。

アートを通じて子どもたちと関わる活動については、他の施設や学校など様々な場で広がってほしいです。

影や布など様々なモノから表現を探す

芸術家と子どもたちの活動

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたちは、1999年に発足、2001年からNPO法人として活動を行っています。
私たちが取り組んでいるのは、現代アーティストと、いまの子どもたちが出会う「場づくり」です。この出会いの場が
子どもたちにとって **潜在的な力を存分に発揮し伸ばす機会**
アーティストにとって **子どもたちと関わり、新たな表現を探る機会** になると考え、主に3つの活動に取り組んでいます。

ASIAS（エイジアス）

ASIASは、Artist's Studio In A Schoolの略。アーティストが小中学校（特別支援学級含む）・保育園・幼稚園等へ出向き、先生と協力しながらワークショップ型の授業を実施する活動です。2010年度からは児童養護施設などでも同様の取り組みを開始し、福祉分野でも自立につながる多様な体験を育むワークショップの可能性を開拓し、実践を積み重ねています。

パフォーマンスキッズ・トーキョー

ダンスや演劇、音楽などの分野で活躍するプロの現代アーティストを、都内の小中学校やホール・文化施設などに派遣。10日間程度のワークショップを行い、子どもたちが主役のオリジナルの舞台作品をつくり上げます。最後に発表公演を行い、多くの方々にワークショップの成果を発信しています。

ぞうしがや こどもステーション

子育て中の親子・家族がいっしょに楽しめるあそびのスペース。子どもや親子を中心に地域の人々がアートを通して交流する場をつくります。世界中の歌をうたい、楽器をかなで、おどり、絵本にふれ、そしてお芝居まで、ワークショップやライブを気軽に楽しめる場をつくっています。

©bozzo

NPO法人 芸術家と子どもたちでは、私たちの活動に賛同し、
協賛・助成・寄付といった形で支援していただける企業・財団・個人の方をお待ちしています。
ご関心をお持ちの方は、ぜひ事務局までお問い合せください。

http://www.children-art.net/

オンライン寄付サイト　Give One
児童養護施設へのアーティスト派遣プロジェクト

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
〒171-0031　東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4階
TEL：03-5906-5705　FAX：03-5906-5706
mail：mail@children-art.net

発行日：平成30年3月1日
発行者：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
編集・デザイン：保手濱歌織

この事業は、公益財団法人東京都福祉保健財団「東京子育て応援事業」の助成を受けて、
平成28･29年度に実施、本誌を作成しました。

※無断転載・複製を禁ず。